

Fukapon

絵: だれもない

セレクトティブ・  
チョコレート  
secondary

セ カ シ ダ リ ・ ア イ

私はボタンと扉を閉じる、はずがない。  
格好悪いな、私。

わずかに開いた扉の隙間からは、中の様子がよく聞こえた。周りが静かなせいもあるだろうが、私の意識が集中しているためなのだろう。声をかけられるまで隣に気付かなかったことからも、それは明らかだった。

「強がる子って、弱いから強がるのよね。」

招かれざる客の科白には、せせら笑いでも聞こえてきそうだが、確かに私は、嘲笑されても仕方のないことをしている。しかしそれに耐えられるほど強い人間じゃない。

「でも、それは悪いことじゃないと思うわ。」

「先生もそうだから、ですか。」

「あら、津村さんは意地悪なのね。」

「先生ほどじゃありませんよ。」

私も、隣の養護教諭、小野原高子（おのはら たかこ）も。本心を守るために言葉を投げ合う。上の空での交戦は決着のつきようもなく、お互いにとつて心地よいものだった。

今、私は、そして隣の先生とは呼びたくもない存在は、音楽室の前で、音楽室の中で起きているあることを、盗み聞きしている。しかし案内中の展開は早かったようで、すでに事は終わりそうだ。そのことに気付いたのは私だけではないらしく、隣の人影がふつと前に出た。

「じゃあ、私は先に行つて彼を待つわ。これ以上何も無いと思うけど、おもしろい続きがあつたら教えてね。」

私の返事を待つこともなく、「ばいばい」と年に似合わず可愛げに手を振つた小野原はすぐその階段を下り、その姿を消した。

「『彼を待つわ』とは、随分と強気なこと……。」

誰もいない虚空を睨み、私は独り言を吐き出した。直後。

——ガチャツ。

ご丁寧にノブをひねつたらしい音とともに、彼が、根谷伊吹（ねや いぶき）が部屋から出てきた。

「ありがとう、ちいちゃん。でもやつぱり、振られちゃったかな。」

伊吹はドア横に立つ私に笑いかけ、淀みなく言葉を綴つた。

私は言葉を返すわけでもなく、笑顔すら返さず、ただ単に彼の瞳を見つめた。さもありなん、だからやつぱり悲しい。そんな色をしている。私にそんな気持ちを見られるのが恥ずかしいとも思つたのだろうか、当たり前のように流暢に身を翻すと、同じ階段を下りていった。

伊吹は私の反応など、欲してもいないのか。優しい言葉をかけてあげるつもりだったのにな。いざ目の前にしたら言えなかった。私にもまだ、多少の良心は残っているらしい。

不穏な響きを含むが、まさにびつたりだと思ふ。私が彼を手引きした。そして今し方、彼は想い人である私の友達、倉田

裕子に告白した。卒業式の後、誰もいない音楽室で二人きり。私にしては親切な誘いだっと思うが、今となつては下心あつてのことだと気付かざるを得ない。私が通ひ詰めている音楽室でなら、そのそばにいてもおかしくない、そして盗み聞きしやすいということか。私自身、気付かなかつたな。

何はともあれ、状況は終息した。どうやら裕子は伊吹の告白を断つたようだ。まさかと言つてもいい結果は、よかつたのか、悪かつたのか。望みというものは残酷だなと、深く考え出す前にはたと気付いた。

裕子が出てこない。普通、少なくとも私が告白を断つた後に、その場にいとどまる理由があつたことはないのだけど……：。どうしたんだろう。さつき伊吹がドアを閉めてしまつたせいで、中の状況は皆目見当がつかない。けれど、何となく部屋に入ることがためらわれる。その感情すら本当のものか怪しく思つたが、どうにも心配になり、私はドアノブに手をかける。

ひんやりと冷たく重たいノブをひねり、ドアを開けた。昼下がりの温かな日差しの中には、人影がなかった。いや、私の視界に入らなかつただけだつた。視線を落とせば、うずくまつた裕子がそこにいた。

……泣いている？

後ろ手にゆつくりとドアを閉じ、裕子の方に歩み寄つた。顔を手で覆い、肩を小さく振るわせている。やつぱり、泣いている。

「どうして泣いてるんだ？」

声をかけても、反応はなかつた。

今ひとつ理解ができない状況だが、裕子はそうそう泣くような子ではない。少なくとも、彼女の涙なんて見たことがない気がする。むしろすぐ泣くのは、私の方で、彼女に「泣き虫」とバカにされたことがあるぐらいだ。その裕子が泣いているのだから、よほどのことがあつたのは確かだろう。

落ち着くのを待つた方がいいかな。近くにあつた席を借りて座り、何も言わずに待つ。

しかしなぜだろうか。伊吹が振られて、裕子が泣いている。よくわからない。外では裕子の声は聞こえなくて、伊吹が「好きです」と言つたのと、程なくして「じゃあね。」と言つたのと、それだけが聞こえた。二つの科白の間に何があつたのだろうか。

ねえ、どうしたの？ 裕子。やつぱり私には、話してくれないのかな……。

心の中では話しかけながら、私はじつと裕子を見つめた。すすり泣く声がかすかに響く音楽室。私にできることは、待つことぐらい。……さすがに、ピアノを弾いて子守唄でもない気がする。

しばらくして。無言の中では長く感じられたけれども、わずか数分だつたかも知れない。彼女は未だ泣きやまず、けれども顔を上げて、何か言おうとしている。せつかくの可愛い顔が台無し。ハンカチを差し出すと、受け取つた裕子は再び俯き、口

を開いた。

「わからない、わかんないよ……。千絵里、教えてよ……。」  
 そう言われても、私にもわからないよ。彼女が泣く理由、私には直感で言い当てることのできない。もし私だったら、という状況があり得ないと思うから。それだけのことよ。感覚を邪魔している何かがあるわけではない。だから、少し考えればわかる。

あのと聞き聞こえてきたのが伊吹の声だけだったのは、裕子が何も言わなかったからだとしたら。伊吹が振られたわけでもなく、裕子が振ったわけでもなく、そういうことか……。

答えられなかったことに後悔するとしたら。答えたかったから。告白の応答で、わざわざ言つてまで伝えたいのはイエスかノーか。言うまでもないこと。言うまでもない、か。

「裕子も、優しいな。涙をこぼすなんて……。伊吹は多分、保健室にいるから。行つてきな。」

依然うずくまつたままの裕子に、私は優しくもなく、厳しくもなく、言つたつもり。

努めていつも通り、平然と穏やかに。心中は決して穏やかなんかじゃない。彼女にこうまで言つても、泣き虫な私は涙一つこぼさずにいる。その程度の想いなのか、素直じゃなさ過ぎるのか。両方かも、知れないな。

いつの間にか宙をさまよつていた視線を地に戻すと、裕子と目があつた。彼女は涙目ながら、「行つてくる」と言わんばばかりで、頷いた。

本当は自分のことを考えるので手一杯。けれども、今の私がそれではいけない。裕子には伝えたいことがある、それならば私は、裕子に伝えさせないと。

もう必要ないかも知れないけど。私は右手を差し出し、その手を取つた彼女を思いつき引つ張り上げる。私の顔を捉えた裕子の表情は、ちよつとびっくりしながらも、意を決した様子。これなら、大丈夫かな。

「裕子っ。初体験なんて、みんなそんなもんだ。思い切つてやれっ。」

くると裕子の背面に回り、今度は無理に背中を押す。彼女自身の意思で手がかけられたドアノブに、私の空いた片手も置いた。そして開放したドアの外に裕子を放り出した。その勢いのままばたばたと廊下を駆けていく裕子に、贈る言葉は決まつていた。

「おめでとう、幸せにしてあげて。」

自らの言葉が、消え入りそうなほど小さいことに、多少の驚きはあつた。もとより聞こえるように言うつもりはなかったが、そこまでハッキリ言えないものかと、改めて切ないものだと思う。新婦を送り出すかのような、告白を受ける程度に似つかわしくないその言葉の力に、私の心は気付いているのだろう。

誰もいなくなつた、音楽室。この静けさはいつとも通りなのに、温かな日差しに包まれたいつも通りの空間なのに、私だけはいつとも通りでいられない。

「さすがに、ピアノを弾く気にもならないか。」  
 そつとピアノの端に手をかけて、独り言とともに小さなため息をついた。

伊吹のこと、好きなのかな。わざとらしく自分に問うてみる。今更な質問だけれども、未だに不安定な想いが消えそうで、声に出して言うことはできず。しかし見過ごすこともできず。こういうのを素直じゃないと言うのかも知れない。それとも、ただ単に、消えてしまう程度の想いのだろうか。

いずれにせよ未練がないわけではなく、ここできつぱり諦められるほど、私は強くもないらしい。かけた左手をピアノに残しながらも、身体は音楽室を出ようと動き出した。三つ歩んだときにピアノから左手の中指は離れ、私をこの部屋にとどめるものは何もなくなつた。

けれども急ぎ足になることもなく、けれども落ち着いて歩くこともできず、保健室へと向かつた。裕子の後を追っているのか、伊吹の後を追っているのか。どちらだろう。また見え透いた質問を自分自身に投げかけながら、嫌らしいほどに明晰な頭の中で考えた。数分後、いや、数十秒後、私は裕子に言うのだろう。「よかつたね」と。そして伊吹にも、「おめでとう」と。けれども本当の気持ちはそんなじゃなくて、現実が成立してしまつた後も、私は伊吹が裕子に振られてることを望んでるはず。叶つたとしても仕方ない望みなのに。大切なことは言えない、素直じゃない、だから結局は自分のせいでうまくいかなかったことを、他人の幸せのせいにしてる。格好悪いどこ

ろじゃない、私はろくでもない人間だな。

程なくして保健室の前に立つと、引き戸に嵌め込まれた磨り硝子越しに夕日が差し込んできた。ここは特別教室棟の一階、日中も廊下は暗い。卒業式の後、大方の生徒が下校してしまつた今は人氣もない。扉から灯りが漏れているのは、だいぶ向この職員室と、この保健室ぐらいだ。

今の私にはびつたりの光景。明るい廊下に並ぶ扉からは笑い声が漏れ聞こえる、そんなだつたらとても立つてはいられないかつた。

もう決着はついたのだろうか。その絶望を見るために、この戸を引くべきなのだろうか。私は立ちつくして、迷っていた。数十秒程度のことだつたと思う、けど実は数分間かも知れないし、数秒かも知れない。とにかく今更その程度の時間迷い、扉に手をかけようとしたそのとき。

——ガラガラッ。

目の前の扉が勝手に開いた。刹那。

「きゃつ。そんなつ。」

「ちよ、ちよ待てくだあ。」

「うあつ、ちよ、ちよと、何よ？」

全くいつも通りの引き戸が滑る音。ともに飛び出してきたのは、伊吹？ 裕子？ いったい何？ あつ、あー、倒れるつ。勢い余つて二人は私を押し倒し、私は危うく、後頭部を強打するところだつた。運良くどこを打つこともなく、訳のわから

ないまま上半身を起こしている。

「いったい何い？」

「ごめん、千絵里。これは、その、あのね……。」

「ごめんね、ちいちゃん。ちよつと、背中を押されてき……。」

身体を起こしてへたり込んでいる千絵里、膝をついて立っている伊吹。二人は何やら気まずそうに私から視線を外している。それとも、お互いから視線を外しているだけだろうか。

私もどうしたものかと左右二人の顔を見比べていると、頭上から嫌な声が出た。

「転んで元気になった？ さ、二人は帰った帰った。ここは病人の来るところなんだからね。」

小野原は私に「あなたはちよつといらつしやい」という目を見ながら、二人を追い払っている。私は彼女に話も何も無いけど、伊吹と裕子に早くここを離れて欲しいのは隠しようもない本心だ。仕方がない、ここは同じ船に乗るか。

「裕子も、伊吹も、なんて顔してるの？ 嬉しいときは笑顔で、ね。一緒に帰るんだろ？ ほら、帰れ帰れ。」

空元気でひよいと立ち上がると、二人の後ろ袷を引つ張り上げる。立ち上がった二人の手を繋がせて、準備完了。

「さ、二人仲良く帰りなさい。」

軽く背中を押し、やはりお互いから視線を外して歩く姿を、ぎこちない作り笑いではばらく見送った。

さて、と。

「なんですか、先生。」

右に向き直りながら放った言葉は、小野原をまっすぐ射抜いたつもりだった。しかしさすがは年上と言ったところか、何事もなく、穏やかな微笑みで私を保健室へと招き入れた。

「そんなに怖い顔しないで、話し相手になつてよ。さ、どうぞ。」  
がらんとした保健室の中は居心地が悪い。仕方なく入つてすぐのところで突つ立っていると、「ここに座つて」とちよつとしたティーテーブルの椅子を引いてくれている。

「ミルクティーでいいかしら？ 頂き物おいしいアッサムがあるのよ。」

窓際の、本来は氷嚢用の氷を割つたりするためであろう台所で、ティーポットを用意しながら聞いてきた。こちらを見るわけでもなく、返事をしないからと言って手を止めるわけでもない。それならば聞かなければいいのに。しかし、答えのない大人げないな。

「ええ、何でも構いません。」

「そんな冷たい言い方しなくてもいいのに。まあ、仕方ないかしら。」

誰が聞いてもふてくされた態度だけれども、一応の返事は返した。対して小野原は、相変わらず私の答えなど意に介す風もない。清々しいほどにあつさりとしている。それどころかどこか楽しげだ。一応生徒である私を、これからゆつくりいじめようとも思っているのだろうか。嫌な趣味。

そんな考えもお見通しなのか、せつせとお茶の準備をしてい

る。それともこの人は、本気で楽しいお茶の時間にするつもりなのだろうか。……まさかね。

仕方なしにしばらく待っていると、ふと。

「ごめん、津村さん。」

小野原の声が飛んできた。はっとそちらに顔を向けると、今度は彼女もこちらを向いている。あろうことかその顔が、「小野原先生」の顔に見えてしまった。さっきまでの笑みは消え、かといって厳しいわけでもなくただ単に真剣そのものと言った風。

「あとで理由は説明するわ。だからお願い、少しだけそのベッドに寝ていてくれないかしら。お願い。」

台所を離れてテキパキとベッドを覆っていたカーテンを開ける。

「本当に、お願い。」

軽く頭を下げる彼女を前にしても、正直、お願いを聞いてやりたいとは全く思わない。それどころか困ることがあるのならば困らせてやりたいと思っているほどだ。しかし、今の彼女に、そんなことをするのは浅はかなことのように感じられた。それに、私にとってはなんのこともない頼みなのだ。

「わかりました。構いませんよ。」

短く答えて、導かれるままにベッドの前に移る。

流れるように彼女はカーテンを閉め直して、予想外に申し訳なきような顔をひよこつと出している。

「ベッドに座っているだけでも構わないから。お願い、しばらくそこにいて。」

そう言い残し、顔はカーテンの合間から消えた。

何があるのかは全くわからない。ここに隠れてると言うぐらいだから、私がいては困る客人が保健室に来るのだろうな。まあ、私にとつて何か不都合のある問題でもない、気にしなくてもよいか。それになぜか、彼女のあの表情は、とても疑う余地のないものと思える。

昨晩は寝不足だったし、ちょうどいいからここで寝ちゃおうかな。

壁のフックに備え付けられていたハンガーにブレザーを掛け、靴を脱いでベッドに収まると、お日様のおい。布団を干したばかりなのかも知れない。

カーテンの向こうには、誰か現れた気配があった。割と落ち着いた男の子の声が聞こえる。知った声ではない。もともと気にするつもりもなかったが、いよいよ全く気にならなくなった。横になつたら本当に眠くなつてきちゃつたし、寝よ……。

掛け布団を引つ張り上げて身体を横にしたとき、はらりと胸元から落ちた。パスケース。これだけは誰に見られるわけにもいかず、胸ポケットに入れていた。二つ折りのそれを開くと、写真が一枚入っている。女の子二人が写つたそれは、五年前の、私がまだ中学生の頃の写真だ。

「この写真も、捨てなくちゃダメかな……。」

写真の中の彼女につぶやきながら、遠のく意識の中、その結論は先送りにした。

……あ、本当に寝ちゃったな……。

目を覚ますともう、さつきまで差し込んでいた夕日はない。正面に見える天井の蛍光灯が点いていないせいか、薄暗い。私が寝ているからって、真上は点けないでおいでくれたのだろうか。

腕時計を確認すると、もう六時だ。さつきここに来たときはまだ二時になっていなかったはず。四時間も寝ちゃったのか……。

身体を起すと、寝不足が解消されたせいか、頭が軽くなったように感じる。

靴を履いてベッドを降り簡単に制服を整え、カーテンの外へと出た。

「あら、おはよう。」

「……おはようございます。」

事務机に座っていた小野原が、こっちを向いて笑いかげながら挨拶してきた。さすがに決まりが悪い。

「ごめんなさいね、さつきは。」

「いえ、構いません。私こそごめんなさい、すっかり寝てしまつて。」

ゆつくりと立ち上がった彼女に私は素直に詫びると、もう帰

ろうかと足を出入り口へと向けた。

「あ、待つて。せつかくだから、お茶、飲んでいかない？」

またあのときの笑みを浮かべると、やはり同じように窓際の台所に立つてお茶の準備を始める。ちよつとどころでなく強いことを言つて敵意剥き出しにしていたのに、つい四時間も眠つてしまった私としては、いち早くこんなところから出て行きたい。故に、いなければならぬ理由は全くないが、あからさまに出て行くこともできない弱さもある。しかしちよいとい言ひ訳を見つけた。

「いえ、結構です。先ほどの理由も、特に気になっていませんから。」

救われた気分で私は窓側に背を向け、一步踏み出す。

「どうあつても帰りたいようねえ。仕方ない、秘密兵器。こんな卑怯な手は使いたくないんだけど。」

背中越しの彼女はちよつと楽しそうだ。ならば余計こんなところにはいたくない。二歩、三歩と足を進める。彼女の言うことなど聞くつもりはない。

「津村千絵里さんのパスケース、ここにあるわよ？」

しかし、聞こえてしまった。よりによつて。

なりふり構わず力一杯の勢いで踵を返し、つかつかと彼女の目の前に立ち、右手にあつたそれを奪つた。

「返してください。」

きつぱりとそれだけを言い放ち、いや、言い放つ前に私はパスケースを取り返した。自分でもわかる。私は真つ赤な顔をし

て、涙目になりながら必死で小野原を睨みつけている。

「ごめんさい。逆効果だつてわかつていたわ。信じてもらえないかも知れないけど、それはベッドから落ちていたの。拾つてあとで返そうと思つていただけけども、その、すぐ帰るつて言い出すから……。」

「中、見たんですか？」

どうしたつて気になるのはそのことだ。彼女は伊吹のことを知つていて、おそらく、この写真に写つている二人が誰と誰かを見抜ける。だから、どうしても見られなくなかつた。なのに。

「ええ。見たわ。……誰と写つているのかもわかつた。ごめんさい。」

「最低ですね。」

キツと見据えた彼女の瞳が、申し訳なさそうにしているのは明らかだつた。そのことは疑いようもない。けれども、これだけは許せない。

「ごめん、なさい。」

謝罪を無下に拒むのは私らしくもない。そうしたいと思つているわけでもない。けれども、この人は私と伊吹の写真を見て、せせら笑つただろう。今更誰かに笑われることなんて何ともないはずだけど、伊吹のことを知つている彼女に笑われるのは、意味が違うのよ。

想像したくもないが、彼女は伊吹のことを特別気にかけていた。伊吹が特別な生徒だからではなく、特別な子だからじゃないの？ だから私は、この人が嫌いな。

無言のまま、睨みつけていた私に、彼女はどうしたらいいのかわからない様子だつた。それでも私は視線を外さない。

「こんなことを言つたら火に油かも知れないけど、津村さんは私のことを誤解しているわ。おあいこなんてつもりじゃないけど。これが、私の秘密。」

困惑したままの彼女が、きつぱりとした動きで開いたのは、事務机の上にあつた自身の手帳。……写真？

「あなたと同じよ。だから、ちよつと、話したかつただけ……。」  
写真に写つているのは、二人の女性だつた。一人は小野原のように見える。もう一人は誰？ でも、そんなことはきつとどうでもいい。彼女が「同じ」と言つたとおり、その写真はとても大切なものに違いなかつた。絵そのものは大した写真じゃない。どこかの部屋で、自分撮りをしたようなものだ。けれども、写真の中の彼女の笑顔は、私を惹きつけた。楽しそう、嬉しそうなだけじゃない。そこにいられることが、凄く幸せそうな顔。パスケースの中の私と同じ。

「……少しぐらいなら、お茶をこちそうになろうと思ひます。」  
同じ穴の貉同士馴れ合おうと思つたわけではない。彼女が写真を見せた覚悟に、私は折れずにいられなかつた。どんなことがあろうと他人に見られたくないその写真を、いとも簡単に私に見せたのだから。そして私の嫌悪は、的から外れていたのだから。

「気を取り直して今度こそ、どうぞ。どれも自由に、好きなた

け入れて。」

保健室には不似合いなティーテーブルの上に、ティーポットとシュガーポット、それに牛乳パックが並べられた。紅茶も砂糖も貰い物なんて言っていたが、牛乳パックには低温殺菌と記されている。

「紅茶、お好きなんですか？ 牛乳をわざわざ選んでいるみたいですけど。」

「よく知っているわね。気付いたのはあなたが初めてよ。」

ちよつとだけ嬉しそうな小野原の表情が、あまり悪い人のものに見えないのは現金だろうか。自分では常に、中立を保って物事を見ているつもりだったけれど。時々、今のようない瞬に、本当にそうなのかなと疑問が湧く。そんな私の心中を察する様子もなく、彼女はマイペース。

「普段はね、コーヒーフレッシュと一緒に置いておくのよ。するとたいいていの人がそつちを選ぶのよね。」

牛乳を入れたカップに熱い紅茶を注ぐ私を満足そうに見ながら。自らも牛乳をカップに入れてる。私と同じように、牛乳を先に入れる人のようだ。

「牛乳を選んだ人は数えるほどだったけど、根谷さんは牛乳を選んできた。」

伊吹の名前に私は一瞬手を止めたが、今は黙ってしよう。何も喧嘩をするために席に着いたわけではないのだから。自身に落ち着けと念じながら砂糖をたっぷり入れると、「おそろいね」と向こう側のカップにはたっぷり以上の砂糖が入れられてい

る。

入れ終わるとスプーンでかき回しながら、話を続けた。

「少なからず驚いたわ。根谷さんが女の子だって聞いて。身体を見れば平均的な男子じゃないことはわかったけど、トランスジェンダーだとはね。自分自身が同性愛者という位置にいるからこそ、数の上でも普通じゃないことは認識していたから。ましてや、うちの学校が男子制服を着てよしとしたことが驚きよ。」

さつきまでの私なら食ってかかりそんな話だが、言っていることはもつともだ。私もこの学校に来て、伊吹が本当に男子の制服を着ていることに驚いた。さも当然のように男の子として生活できていることに、しばらくは純粹に感心してしまったほどだ。性別で何かを決めるなんておかしな話だが、世の中はそうできていて、私たちは諦めなければならぬのだとどこかでは思っていた。けれども。

「それに加えて、彼はあまり隠そうとしないでしょう？ これには本当に驚いたわ。私がこんなことを言っただけなのに、これに本当に驚いたわ。私がこんなことを言っただけなのに、これに本当に驚いたわ。俄然興味を湧いたわ。そして養護教諭である私はよく相談を受けたりしていたから、弟ができたようになつたのね。素直な可愛い、好みの子だもの、そりゃあれこれと構うわ。」

「それで、伊吹と親しかつたのですか？」

「ええ、仲はよかつたと思っただけ。だから、あなたの考えているようなことはなかつたの。確かに、教師として過ぎた行

為はあつたと思う。あれこれ言つたもの。だからつて、セック  
スやそれに準ずるようなこともしていないわ。恋をしていたわ  
けでもない。」

嘘はついていない。

ティーカップを口元まで運んでいる彼女の目は、潔白だと訴  
える目でもなければ、勝手に解釈すればと投げ出す目でもない。  
ただ私を見て、答えを待っているだけ。そんな風だ。それに写  
真のこともある。

「その話だけだつたら信じませんけど、もう、いいですよ。疑  
つたりしていませんから。伊吹から先生の話を聞いて、少し、  
嫉妬が入つていただけなんだと思います。」

とどのつまり、そういうことなんだ。もう少し早く気付いて  
れば、今の居心地の悪さを味わわずに済んだかも知れない。

「私はあなたの気持ちがわかつていたはずなのにね。ごめんな  
さい、こんなことになつちゃつて。」

私も、ごめんなさい。自分の気持ちにまた気付けないで、勝  
手に不機嫌になつて。

そう口にはできない私には、素直に謝つた彼女が大人なんだな  
と初めて思えた。今までもろくでもないヤツだなんて思つていた  
ことが申し訳ない。私もいつか、こんな風になれるのだろうか。

綺麗に飲み干したティーカップをソーサーに戻すと。

「ごちそうさま。」

きつと今の私は、ここに来たときを忘れたような、穏やかな  
顔に違いない。そんな違いを認識させられるだけでも恥ずかし

い。早々においとましよう立ち上がった。

「では、私はこれで。」

「そう言わずにもう少し話し相手になつてよ。」

「はい、では。」

さようなら。

と言おうとして気付いた。私は何に「はい」と答えた？

「ありがと。じゃあ、お茶菓子にケーキでも出しちゃおうかな。」

あ、あの、あー、やつぱり間違つたか。

帰るつもりで、決まり文句の如く「はい」と答えたのだけ  
ども。冷蔵庫から楽しみにケーキを取り出す小野原を見ると、  
どうにも帰るとは言いづらい。仕方ない、しばらくつきあ  
うか……。

「さて、と。」

二人しかないテーブルに、五つものケーキが並んでいる。

これ、どうしたんですか？ と聞くまでもなかった。

「今までありがとございました、つて置いていった卒業生が  
いてね。今開けてみたら五個も入つていたのよ。残しても悪く  
なつちゃうだけだし、食べて食べて。」

そう言いながらモンブランを引き寄せている。

「では、遠慮なく。いただきます。」

私は苺のミルフィーユをもらうことにした。諦めてフォーク  
を入れると、待つてましたとばかりに言葉が流れてくる。

「あのね、この写真の子なんだけど。可愛いでしょ？」

左手を伸ばし、事務机から手帳を拾い開きながら、本当に嬉しそうに話している。私が伊吹の話をするときも、ひよつとしたらこんななのかも知れない。そう考えると恥ずかしいとしか言いようがない。

「津村さんはもう気付いていると思っけど、この子が私の好きな人。白井香澄（しらい かすみ）、母方の従姉妹で三つ年下でね、小学生の時に初めて会ったの。誰かのお葬式だったと思うんだけど、年端のいかぬ子どもには遠縁の葬式なんてどうでもいいことじゃない？ 退屈で仕方ないときに香澄と出会って、一応着ていた喪服のままお寺駆け回って遊んだ。」

そうそう、小さい子供にお葬式って退屈なんだよな。

ってえ、そうじゃないって。これ、話長くなりそう。

「あの、先生、この話って長いですか？」

「え？ んーそうねえ、あまり長くしないようには努力するけど……。話相手ができて嬉しいからねえ。長くなっちゃうかも。」  
はあ、まいったな。私はそんな顔をしたつもりだが、目の前には満面の笑みしかなかった。

さつきまでと違って、嫌いなヤツの前にいたくないとか、話したくもないとか、そんなわけではない。単に、人の幸せ話を長々と聞かされるのは勘弁願いたいと言うだけだ。そして暗にそう言ったつもりなんだが……。全然わかってもらえていない。

何事もなかったようにまた話しているよ、この人は。

「そのときは別にね、恋しちゃったとか、そんなんじゃないよ。その数年後、中学一年の時にたまたま彼女のおうちに泊まりに

行く機会があつて、そのとき『好きなんだ』って気付いたの。それまで私は」

「あー、ちょ、ちょと、先生。もういいですから、私、人の幸せ話嫌いなんです。もう十分わかりましたから。」

何事も早期発見早期治療。危ないとわかつたらとつとと止めよう。言わなくちゃわからない相手には、ハッキリ言うことも大切。ね。しかし、全く持つて効果なしだとは……。

「えー。じゃあ、不幸な話ならいい？」

「あの、そういう問題じゃなくてですね……。」

「香澄ね、来週、結婚するんだ。」

「そんな話は、……へ？ 結婚ですか？ 先生と？」

しまった。

まずいことを聞いてしまった。何やつてるんだ、私。バカか。

女性同士が結婚できるわけがない。となれば。

「そんなわけないでしょ。つきあつてもうすぐ二年になる彼氏と。年は私と一緒に言つてたから、二十九かな。社内恋愛だつてき。そりゃ勝ち目ないわよね。」

それで、不幸な話か……。平然と、笑顔のまま話しているけど、つらくないはずがない。だからこそ笑顔なのかも知れない。私もやっぱり泣くことができなかつた。でもそれは、想っていないからとか、悲しくないからとか、そんなんじゃない。

「あ、の、その、ごめんなさい。知らなかつたとは言え……。」

幸せな話が嫌いだなんて私が言つたから、こんな話をさせることになつてしまった。本当に、ごめんなさい……。今日の私

は、ろくなことしてない……。

「気にしないで。あなたにもそのうちわかるわ。結婚まで来ると、そんなにつらくもないの。予定調和ってヤツ？ 予想できたもの。」

「でも……。」

「本当に気にしないでいいのよ。じゃあそうだ、どんなときが一番つらかったか教えてあげる。初めて手を繋いだ、初めてキスした、初めて抱かれた、とか。そんなときかな。行為が行うだから、余計に『私が女じゃなければ』って思っちゃって、どうしたらいいかわからなくなった。つらいけど泣けないし、つらいつて言えないし。だって、嬉しそうに報告する香澄の前で、泣くわけにもいかないじゃない？」

それでも嬉しそうな表情に、私は本当のところをどう読んだらいいのかを判断しかねた。私自身の経験に置き換えれば、話すことすらためらわれる。けれども、彼女の笑顔には全く翳りがなく、言葉通りの本心にも思える。

日常生活においてわからないことはわからないと言ってしまう私は、こうした場合、どうやって黙っているのが適切かわからない。そう、わからないのだ。だからといって、わからないと言っている場面にも思えない。

「んー、やっぱり気にしてるの？ ほら、私だつて一応もう二十九だし、普通の女性だったら失恋の幾度かはしても当然、それを笑い話にだつてしていると思わない？ 同じ感覚だと思ふのよ。」

そう言われると、確かに、そうかも知れない。そうだと思うしかない。……ここは甘えさせてもらいます。

「そこまでおつしやるなら、わかりました。許してもらえたとにします。」

「そうそう。だいたい、私が話したくてあなたを引き留めたんだから。それでね、結婚したら私、どうしようかなって。もともと香澄は、私を年の近い姉だとしか思っていないなかったけど。やっぱり違うじゃない？ だからつてすぐに、香澄が好きじゃなくなったりもしないし。ね、どう思う？」

「想い続ければ、いいんじゃないでしょうか。」

「やっぱりそっか……。あなたもそうなんだ？」

すつと出てしまつた言葉に再び慌てる間もなく、小野原の返した言葉に慌てた。

私はきつと、明日も、伊吹のことを想い続けていると思う。けれども、そんなこと誰にも言いたいわけないじゃない……。

顔が真っ赤になっているのがよくわかつた。

自然と俯きがちになる自分が、どうにも制御できなかつた。

とにかく恥ずかしかつた。何が？ 伊吹を好きでいることが？ 未だに諦められないことが？

なんだろう、そんなことじゃなくて。

「可可愛いつ。私もそんな時代があつたな。似てるのよ、私たち。だから一緒に想い続けていきましょう。人には一つや二つの秘密はあるものだし、表裏があつても何もおかしいことなんてないわ。昼は涼しい顔で友達して、夜は想いに耽つたつていい

じゃない？ それがバレたときの恥ずかしさは、今味わつてるとおりだけだよ。」

そう、私が私じゃないみたいで。

見られたくない私を見られたから、こんなに……。

「さて、と。今日はそろそろお開きにしましょうか。時間があつたらまた来て。」

真つ赤になつたまま制服のプリーツを凝視し続けていた。もう手遅れだつてわかっているけど、こんな顔上げられない。

「ねっ、千絵里ちゃんっ。」

「ひゃっ。」

突然首に腕がからみつき、左耳のすぐ前で声が。

「や、やめてください。」

「やあだ。千絵里ちゃんはあまりに可愛いので、私の妹に決定。だから姉の言うことは何でも聞くの。姉の、私のおもちゃだもんねー。」

「ちよ、ちよっと、何わけわかんないこと言ってるんですか。」

強く合わさる首筋から、甘い香りがした。

少しだけ心地よいその香りに一瞬くらりとしたけど。

「わけわかんなくないよ。一人っ子だからさ、欲しかったの。」

話し相手になつてくれる姉妹が。」

今、彼女の腕をふりほどかないのは香りのせいなんかじゃない。い。

「……………仕方ないな。…………高子、姉さんは。」

秘密は一つや二つでいい。表と裏、一枚ずつでいい。だから

今は、素直になろう。同じ失敗を繰り返しても仕方ないじゃない。い。

「ふふーん、やつぱり千絵里ちゃんはいいい子ね。」

「姉さんが悪い子過ぎるんです。」

これから彼女のことをどう呼ぼう。

せめて小野原先生？ 心の中で高子姉さんは恥ずかしい？

「そうねえ、それは言えてるわねえ。」

妙に納得しながら笑い出した姉の横で、私はゆつくりと顔を上げた。

「妹に手を出しちゃダメですよ？」

「大丈夫よ。姉さんはこれでも一途なんだから」

真正面に見えた鏡には、二つの笑顔が写っている。

……………似てない姉妹、だな。

## あとがき

ラストシーンは幸せいっぱい、ですよネ？

書いてて楽しかったです。女の子っていいなあ。

別に女の子だからってわけじゃないと思うんですが。と言うより、女の子がみんなこんなだったら驚愕ですよ。

お久しぶりです、みなさま。自身の宣言を裏切り、大方の予想通りに夏コミ以来のあとがきとなりました。そして前作に引き続き、いや前作を軽く凌駕する強行スケジュールでの執筆となりました。初稿はクリスマスから三日間、ここから校正作業に割ける時間はどれだけあるのでしょうか。ラストシーンへの繋ぎと伏線張りが完全に抜け落ちているんだよなあ。間に合うのかなあ。

挨拶の順序がぐちゃぐちゃですが、最後まで読んでくださったみなさま、ありがとうございます。ひどい文章にも負けず、抜け落ちた描写にも負けず、本当にありがとうございます。こうして書き続けていられるのは、みなさまのおかげです。

今回の作品は、夏コミ本『セレクトタイプ・チョコレート』の続編です。もちろんこの作品から読まれた方にも楽しんでいただけたらいいんですが、前作から読んでいただけるとも

っと楽しんでいただけるとは違いありません。未読の方は是非前作も。サークルか個人のウェブサイトにデータが転がっています。

実は続編ものを書くのはこれが初めてなんですけど、今回は前作の段階で続きが見えていたので、あっさり書き出せました。しかし前作を書き終えてから本作を書き出すまでの間に千絵里が成長しちゃったらしく、序盤若干、繋がりが悪いですね。え？ 別人？ みたい。さらに前作では全く見えない部分を描いたので、続編らしさがあつたのかも微妙。いっそ新作でよかつたんじゃないの？ なんて言わないで。まあ、その辺は次回までの宿題です。……え、まだ続くの？ はい、続きますよー。多分。

べたべたに甘い『セレクトタイプ・チョコレート』の続きですから、やっぱり甘いのを期待してくださった方もいると思いますが……。ごめんなさい。今回は割と暗く、厳しいお話になっています。前作の二人はとも素直な子たちで、汚れを知らぬタイプだったと思うんです。じゃあ今度は、逆に素直じゃなくて、汚れを知りつつも清くいるような変わり者を書いてみようかなと思つたときに、甘いだけにはならなかったのです。

それどころか恋愛ものにもなっていないかったり。要素としては忘れていないつもりなんですけどね。恋愛レンズを通して撮影した日常、そんな感じでしょうか。日常とぼかしましたが、

千絵里は意外と私に似た子なので、一部は自分の思ったことをそのまま書いています。私を攻略したい方は参考にしてください(笑)

さて、今回もこの辺でお別れです。もう、次回予告をやめてもいいですか？　なんて弱気なことを言わずに、ちゃきちゃきと予告しますよ。

コミティア79に参加予定です。とゆわけで、バレンタインデー用のお話をまた書かなくちゃ。なんか、年間通してバレンタインデーしてないか？　という疑問は残りますが、気にしません。ひよつとしたら『セレクトタイプ・チョコレート』の続編になっちゃうかも知れませんが、気にしません。四月の新学期、千絵里たちが三年生になってからのお話ですかね。

平行して、前作と本作の加筆修正版も作りたいと思っています。あまりにひどいんだもん。

それではみなさま、よいお年を。

二〇〇六年十二月、あれもこれも山積みの作業場にて。

セレクトティブ・チョコレート secondary I  
Fukapon

2006年12月31日 初版発行

発行所 まにふいくみやほか  
印刷/製本 project KAIGO 東川口分室

Copyright (C) 2006 Fukapon <[fukapon@projectkaigo.org](mailto:fukapon@projectkaigo.org)>  
<http://www.projectkaigo.org/>